

# 7章 成果と課題

---

酒井将平 田尻美千子

主体的な学び研究会では、ベネッセ教育総合研究所の協力のもと、この一年間活動を行ってきました。多様な校種、学校、教科の先生方、そして主体的な学びに関心のある方々が集まり、ICEモデルについての理念を共有し、共通のフォーマットを用いて授業に取り組み、協議を重ねて来ました。多様な背景を持った人が集まり、共通の枠組みで実践し協議する中で、ICEモデルと主体的な学びについての深まりを得ることができました。以下に、その成果と課題をまとめます。

## 7章1節1 成果と課題

---

酒井将平

### 1 成果

#### ◎評価問題（5章2節）

ICEモデルに基づいた問いづくりの実例集を示すことができました。実際に考査問題として用いたものも含んでいます。

#### ◎授業デザインシート（5章1節）

評価問題を学びの流れの中に位置づけた授業デザインの実例集を示すことができました。

#### ◎実践詳細（9章1節）

ICEモデルを導入した学びの詳細な記録集を示すことができました。

#### ◎組織的な取り組み（6章）

ICEモデルのような取り組みを学校内に拡げていくためのポイントを実例に基づいてまとめることができました。

#### ◎教材等の開発（4章）

ICEモデルに基づいて開発された、学びの質を深めるためのツール等について実践例とともに紹介することができました。

#### ◎理論の紹介（3章1節、2節）

ICEモデルについて、基本的な概念や導入の仕方を整理しまとめました。

#### ◎論考（3章2節）

実践の中で、ICEモデルについて考えてきたことをまとめました。

## 2 課題

### ◎他教科、他科目、他校種、他領域からの検証

多様な人が集まって活動してきたと述べたものの、上記の成果についての検証はまだまだ十分とは言えません。実践例では扱われていない教科や科目もたくさんあります。また、今回の実践例では中学校や大学の取り組みも紹介されていますが、校種間の取り組みの比較についてはこれからの取り組みが期待されます。

### ◎「教師がデザイン」から「生徒がデザイン」へ

今回の記事はそのほとんどが教師の学びのデザインについて書かれたものです。主体的な学びや探究的な学びを実践していくためには、生徒が自らの学びをデザインすることが必要です。質問づくりの取り組みが紹介されていますが、次の一步としては、作った問いを構造化して探究計画を作るといような取り組みが考えられます。

### ◎「問い」そのものについての考察

Connections の問いとして「洞察を促す問い」を、Extensions の問いとして「how far の問い」を取り上げました。「洞察を促す問い」については、同質性・異質性、関係性という観点から言及しましたが、関係性からの説明が十分ではありません。また、同質性・異質性と関係性の関連についても検討が不十分です。「how far の問い」については、世界史の実践における紹介にとどまりましたが、他の教科や科目における検討が期待されます。

研究会の活動は、「主体的な学び」についての学びであったと捉えることができます。ICE モデルという基礎的な知識を設定し (Ideas)、共通のフォーマットに則り多様な実践が行われました (Connections)。そして、取り組みの成果物がこのレポートです。読んでくださった方々にとって価値のあるものになればと思っています (Extensions)。

## 7章1節2 成果と課題

---

田尻美千子

この1年間の探究活動は、これ以上もないくらいの濃密な体験となりました。感謝の念に堪えません。主体的な学びを探究しているという共通意識と、ICE モデルを共通項に、濃厚に充実感の得られた議論をすることができたことは、教科も校種も年齢も違うからこそ得られたのかもしれませんが。

この体験の中で痛感したことは、読書量の少なさです。読み足りていないことを実感しました。話題や議論に上がったものを読めるということ、これもこの会の一員となったからこそその収穫でした。話題となる書籍で、オンライン読書会などできないものかとも思います。こうしたことも、今後の建設的な提案として課題に挙げさせていただいてもいいかなと思います。

原稿をまとめる際に意識し続けたことは、記事の読後、関心のある人が一人でもいいから気軽に取り組みたい気持ちになれるものにしたいということです。そのために必要なことは、取り組みが面白そうに感じられることだと思いました。実際少なくとも私は、やっていて面白いから続けているのです。生徒が満足そうな顔をしたり、楽しそうに手の込んだ課題記述を提出してくれたりするから、「もっと充実感の持てる工夫はないか?」「もっとわくわくするものにできないか?」と工夫を続けています。その中心にある気持ちが、少しでも共有できる記事となっていましたら幸いです。

このような、貴重で充実した時間と機会を与えていただきましたことに心から感謝申し上げます。